

## ちよつとワインと旅の無駄話（その四）

### ロバート・モンダビ

Sさんと、次に訪れたのは、「オーパスワン」の入り口前の道路、二九号を隔てた反対側にある「ロバート・モンダビ・ワイナリー」である。ワイン音痴の僕でも「モンダビ」の名前ぐらいは知っていた。カリフォルニア・ワインというと必ず出てくる名前である。「オーパスワン」が

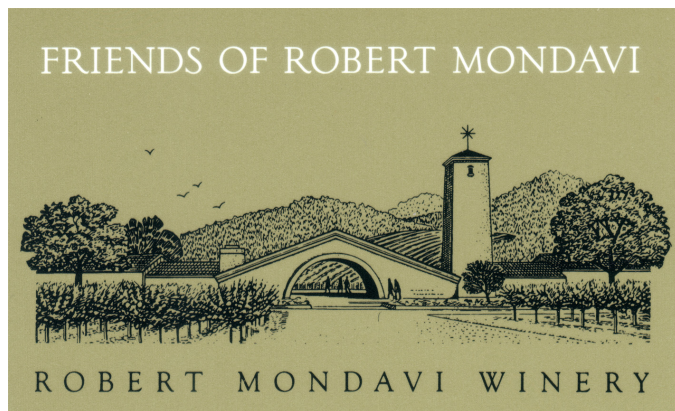
美味かったし、その共同設立者が興したワイナリーということもあって期待に胸を弾ませる。

二人とも勇んで出かけた。尖塔——これが包装紙のデザインにも採用されている——のある新館は斬新な建物だけれども、それに繋がっている建物は、僕のイメージに合うワイナリーの雰囲気を漂わせている。

「オーパスワン」よりも、多くの観光客で溢れている。普通なら、それだけで顔をしかめるところだけれど、それだけ人気があるのだろう、それだけ美味しいのだろう、とすべて良い方に考える。その歴史などを説明する資料館のようなものがあつたけれど、一目散に試飲室に向かった。

試飲室も混んでいた。「オーパスワン」のようにうるさいことは言わない。多くの銘柄





唯一の収穫と言えば、無料で会員になり、会員証を手に入れたことぐらいだろう。もつともメールアドレスを記入すれば、ワイン・ニュースを流すという話だったのだけれど、かるく半年は過ぎているのに一通も来ていない。もう少し待っても音沙汰なしだったら、問い合わせをしようと思っている。

もつとも二度目に訪れたときには少し違った。初めから期待はしていなかったし、それよりも、成功を納め、「ナパバレーの大使」などと言われるまでになった「モンダビ」そのものの歴史に興味があった。それで試飲はほどほどにしてワイナリーを探索することにした。展示を見たり、ブドウ園にも足を運んだりした。

しかし、ちよいと目はともかく、やはり「オーパスワン」の方が、ブドウ園の手入れも行き届いているように思えた。

るので、早々に引き上げることにした。



の試飲をさせてくれた。白ワインもあつたので、珍しく、それも試した。しかし、いずれも、それほどの感激はない。

赤はカベルネ (Cabernet) やメルロー (Merlot)、白はリースリング (Riesling) やシャルドネ (Chardonnay) などのブドウを原料としている。白ワイン用のブドウはカナダのアイスワインの主な原料にもなっているものである。それでも結構な量を飲んだもので少し酔いが回った。それで、まだ行きたいところがあ

なお、「ロバート・モンダビ・ワイナリー」は、一九六六年イタリア移民の息子ロバート・モンダビ氏とその家族が設立したものだ。モンダビ家はロバート氏の父の代から家族でワイナリーを経営していたけれど、ロバート氏は経営上の確執かくしつから家業を追われたため、自らワイナリーを設立したのだという。

経営上で対立したというのは、多分、ロバート氏が普通のワイナリーの経営者と比べて遙はるかにビジネスに長けていたためだと思われる。事実、独立した後、同氏はカリフォルニア・ワインを世界に広める立役者になった。世界各国に輸出する一方、チリやイタリアでも合弁会社を作り、ワイン製造を行う。さらに外食産業や食品産業と提携すると同時に、ワイナリーでのコンサート開催など文化活動にも力を入れ、そして一九九三年には株式上場を果たしたのだという。

## ニーバウム・コッポラ・エステート・ワイナリー

Sさんと僕は次のワイナリーに急いだ。同じ二九号線に沿ったところにある、「地獄の黙示録」や「ゴッド・ファーザー」などで知られる映画監督のコッポラ氏が経営しているワイナリーだ。そこにはコッポラ氏が監督した映画で使われた、

もろもろの衣装から小道具などが展示されている。なかでも、同氏が監督した映画「タッカー」に出てくる、幻の名車「タッカー」もあるという。Sさんは、その話を始めると、それだけで、もう興奮していた。

「タッカー」——Sさんの話を聞きながら思い出した。第二次大戦の直前、デトロイト郊外の小さな街で、ビッグ3相手に、「夢の車」作りに情熱を燃やし



た男がいた。より速く、より優雅に美しく、優れた安全性と機能性をもつ理想の自動車を追求する。時速二〇〇キロぐらいで走る流線型の車だ。



その車は「タッカー・トローペード」として実現する。ところがビッグ3は、彼を叩き潰しにかかる。この実際にあつた話を映画化したのが、ルーカスとコッポラである。なかなか夢をかき立てる一方で、現実の社会の凄まじさと暗部を感じさせる映画だった。後で調べたら一九八八年の映画だった。この「夢」は、結局、潰されたのだが、その一端は現存する車からうかがえる。約五〇台しか作られなかったという、この車がコッポ

ラのワイナリーに展示されているという。

初めて実物を見た。とても五〇年以上前のデザインとは思えない新鮮さが漂っている。改めて、「夢」を持つことの素晴らしさに胸が一杯になる。同時に、こうした「夢」を持ってなくなっている自分にフツと寂しくなった。

これに圧倒されたのか、正直言つて、ワインのことはあまり覚えていない。まあ可もなく不可もなしだったと思う。数杯、試飲してワイナリーを後にした。もう、かなりいい気分になっていた。

もつとも昨年秋、「モンダビ」の後、再び訪れた時には、今度こそ、きちんと味を判断し、全体の雰囲気も楽しまなければという気持ちで臨んだ。ほろ酔い加



出口にも売店があった。それを黙って通過すると、かつてとは見違える景観が飛び込んできた。造園工事と同時にレストラン建設をしているらしい。屋外にテーブルが用意され、そこでワインなどを楽しめるようになっていくけれど、早晩、これは装いを新たにするのだろう。振り返ってワイナリーを見ると、建物は同じだけれど、景観がすっかり変わっていた。いかにも年代を感じさせるたたずまいになっている。まさに演出である。



後ろからせつつかれる気分で、かつての熟成所に入る。しかし、並んでいる樽はすべて空。まさに映画のセットである。それでも、それなりの雰囲気させるのだから、見事としかいいようがない。デイズニールランドである。

減にはなっていたものの前回よりは遙かにしつかりしている。観光客は増え、従業員も三倍ぐらいになり、さらにコッポラ・グッズの店が試飲室を占領する。ゆつくりワインの試飲を楽しむ余裕はない。列を作って、とりあえずコッポラの名前の入ったグラスで試飲する。組み合わせ二種類を味合うので精一杯だった。

ところで肝心のワインだけれど、口当たりの良い、万人受けのするメルローが中心で、まずいとは言わないけれど、物足りない。ワイナリーは綺麗になり、従業員の愛想も良くなり、まるでディズニールランドのようになっていいるのと同じで、ワインもつまらないものになっているように思った。

## 忘れてしまったワイナリーとレストラン

順調に来たのだけれど、今回は、その後はいただけなかった。Sさんと一緒の時は運転手兼ガイドがワイン通だった。それで酔っぱらいの二人を乗せて、それほど有名ではないけれど、見逃せないということで、二九号線を離れ、小さな、それでいて趣おもむきのあるワイナリーに連れて行ってくれた。そんな中の一つで食事も楽しんだ。しかし、残念ながら、名前はまったく覚えていない。



それでも写真も撮ったし、景観などの記憶は残っているのだから、近くに行けば、すぐに思い出すだろうと簡単に考えていた。それで出掛けた。

ところが、今度の運転手兼ガイドは、どの団体客もが行くようなワイナリーとかレストランしか知らなかった。いくら写真のようなイメージを話しても、どのあたりか見当も付かないという。仕方なく、たしか幅広い二九号線から一本内側の通りを行ったように思う。すると美しい風景と洒落<sup>しゃれ</sup>たレストランにも出会うと思う、とアドバイスした。

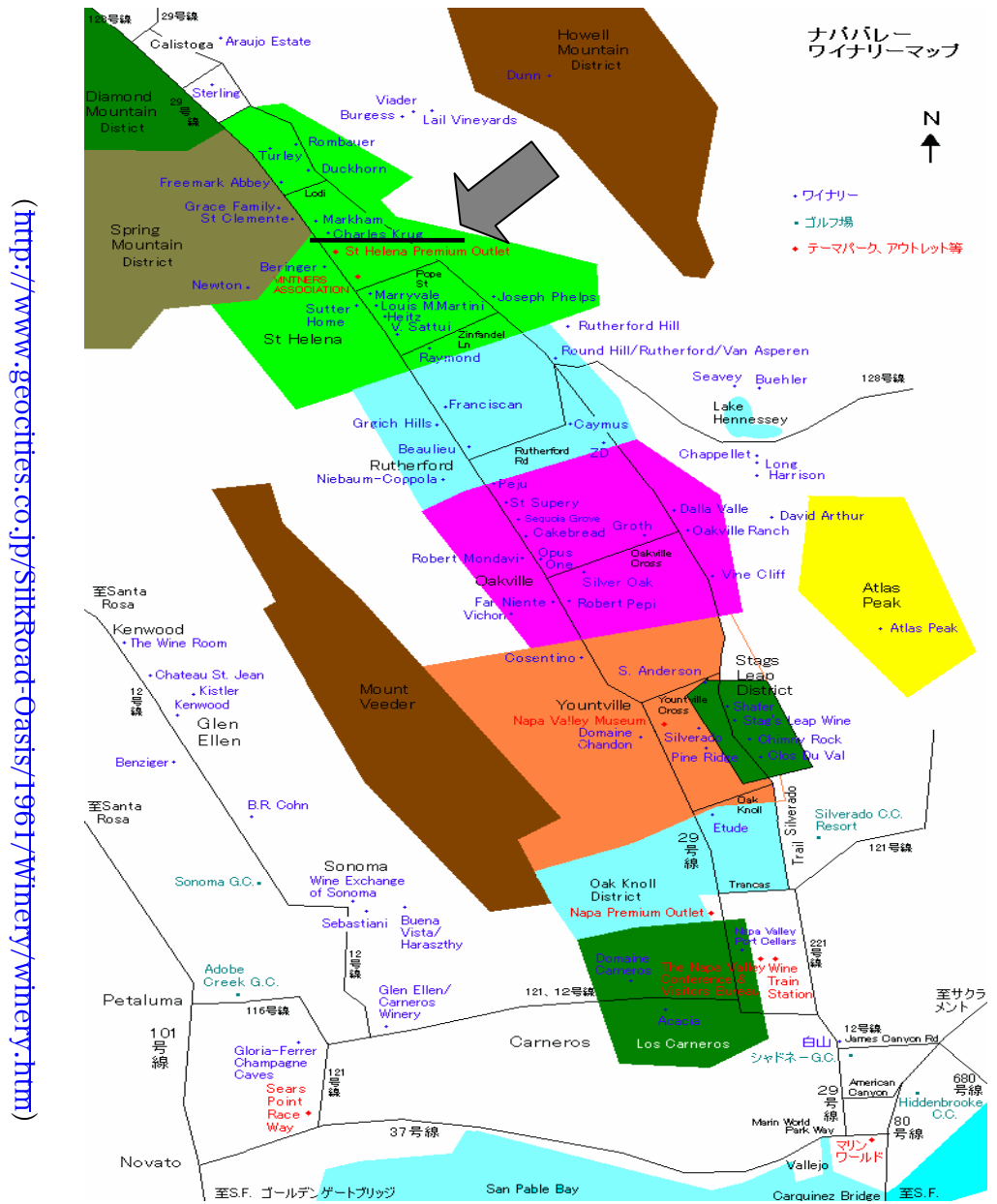


ところが記憶にある風景はいくら走っても出てこない。上の写真の似ても似つかない風景が延々と続く。うろうろしたけれど分からない。

しかし、そのお陰で、ブドウの灌漑方法が良く分かった。敷設された長い金属製チューブの穴から細い水がカーブを描いてブドウの木の根本付近に注がれている。五〜一〇センチぐらいの距離だ。この方法がナパバレーの気候と土壌にもっとも適しているのだという。

そのうち空腹に耐えられなくなったので、Sさんと一緒に回った一帯を探すことを諦めた。事前に調べておいてから、また来ようと諦めた。そして運転手兼ガイドが知っている中で、お勧めのレストランに向かうことにした。

なお、日本に戻ってナパバレーの地図を調べたら、間違えた理由が分かった。次の地図で、中央の二九線にそって「コッポラ」に行ったところまでは良いのだが、そこから右折し、二九号線と平行する道路にぶつかったところで、また右折したのがいけなかった。目的地は地図で「黄緑」色に塗られている一帯だった。矢印のところが、写真に写っている、以前、Sさんで行ったワイナリーだった。



さらにナパバレーのホームページ（<http://www.napavinners.com/index.html>）も見つかった。ここにアクセスすると、これよりもっと詳細な地図とワイナリーの説明なども掲載されていた。またナパバレーの隣の谷、「ソノマバレー」のホームページ（<http://www.sonomavalleymine.com>）もあった。ナパほど有名ではないけれど、このワインも美味かったことを思い出した。事前に、しっかり調べ、再度、ソノマバレーを含め、ワイナリー巡りをやろうと改めて決意した。

ところで運転手兼ガイドに連れられて行ったレストランは、懸念していたほど悪い雰囲気のところではなかった。もっともワインは、ワインリストを眺めたけれど美味そうではない。それで食事だけで飲み物は水にした。ウェイトレスは怪訝（けげん）そうにワインを勧めたけれど、もう飲み過ぎなので結構だと断った。





それでもほろ酔い加減で木陰の椅子に座って、周囲の雰囲気浸っていると、  
身も心も華<sup>はな</sup>やいでくる。時が静かに流れた。

帰りに噂に聞いていたワイン列車に出会った。  
一日一往復。ワインと食事を楽しみながら、ナパ  
バレーのセントヘレナまで行って、戻ってくるの  
だという。話の種に乗ってみるのも悪くはないと  
思った。

(つづく)



二〇〇三年夏 伴 友貴